

学生海外調査研究	
17世紀後半－18世紀におけるオランダの日本商館に関する史料調査	
矢田 純子	国際日本学専攻
期間	2008年9月3日～9月18日
場所	オランダ（デン・ハーグ）
施設	オランダ国立中央文書館

内容報告

一、海外調査の位置づけと必要性

今回の調査において対象としたのは、オランダの日本商館に関する史料であり、具体的には長崎出島でオランダ人の商館長によって書き継がれた「オランダ商館長日記」（以下、「日記」と記す）の調査を計画した。オランダ（1799年まで連合東インド会社〈Verenigde Oostindische Compagnie 以下、VOC〉、1859年までオランダ領東インド政庁）の日本商館は、はじめ平戸に設立され、1641年（寛永18年）には長崎に移された。その商館で書かれた業務日誌が「日記」であり、江戸時代の日蘭関係史の根本史料となっている。しかしながら、「日記」の原文はオランダ語で書かれているため、日本人研究者によっては日本語訳が存在する部分を中心に利用されてきた感がある。なお、長崎で書かれた「日記」のうち現在日本語訳が刊行されているのは17世紀前半（東京大学史料編纂所編『日本関係海外史料』オランダ商館長日記¹、正保4年（1646）9月まで、継続刊行中、および村上直次郎訳『長崎オランダ商館の日記』²1641年6月から1654年10月まで）と19世紀前半（日蘭学会編『長崎オランダ商館日記』³1823年度〈文政5年〉まで）が中心である。現在、訳文の底本としてオランダ国立中央文書館には、「日記」の本国（オランダ）送付用複本が伝存し、ほかにも日本商館関係史料が保存されている。筆者は2008年2月に日本商館関係文書を閲覧したことがあり、利用に関して一通り把握し、滞りなく調査ができることも同館を調査地に選んだ理由であった。

ここで、これまでの近世期の長崎に関する先行研究と筆者の研究テーマについて簡単に述べておきたい。長崎は「政治・宗教・貿易といった外的要因」により都市が成立したと指摘されるように⁴、1570年（元亀

元年）のポルトガル船の来港を契機として翌年開港し、天正年間（1583年～）においては宗教上の重要な場所としてだけでなく、貿易拠点としても重視された。そして江戸幕府の対外政策により、特権的な貿易都市、異域との境界、異国人が集中する地としての性格を持ち⁵、オランダ・中国との交易の窓口として機能し、発展してきた。そのことから近世期の長崎に関する研究は幕府による対外政策や貿易制度の変遷、貿易の数量的な分析など、貿易面を中心に膨大な蓄積がある。一方で、貿易都市であった長崎に視点を据えて検討の対象とした研究は特に1990年以降盛んに行われるようになってきたものの、未だ少ない状況である。

ところで、筆者はこれまで貿易都市論の視点を参考として、長崎の都市の性格や構造を、都市基盤の観点から分析してきた。そこでは特に米需給の実態に注目し、米穀を供給していた周辺地域との関わりを通して長崎の経済的、社会的地位の解明に努めてきた。その際には長崎や各地方に残された史料（古文書）を使用している。また、近世期から実施されている伝統行事という文化的側面にも注目し、都市としての特質を明らかにする作業を続けてきた。16世紀後半の開港以後、長崎を訪れた数々の外国人が様々な記録を残している。その記録のうち、本研究では「日記」を積極的に使用することで、日本側の史料に主に依存して進めてきた研究に対して、新たな視点を加えることになる。これは日本史や日本文化研究にとどまらない、世界史の文脈から長崎を捉え直すことにつながるとも考えている。

そこで調査にあたり、具体的に以下の二つの点を課題として設定した。一点目は、「日記」で用いられている一つの語彙（geldkamer 英訳すれば gold chamber）

に主眼をおき、追っていくことである。もちろん「日記」は業務日誌という性格上、貿易取引に関する記述が多い。また彼らは1641年（寛永18年）以降出島に居住することを強要されてから、数々の制限の中でも長崎についての記事を残している。それらは、長崎の地役人たちとの日常のやりとりや、通詞を通して仕入れた情報であり、長崎での貿易の構造や時に町組織のあり方を知ることができる。今回注目していく用語は貿易取引、それ以外の場面でも用いられ、日蘭双方の共通理解の上に用いられていたと考える。そして、17世紀後半以降に頻繁に使用されるようになることがすでに把握できていたことから、その変遷を拾い出すことにより、貿易都市長崎の特色を明らかにしていきたいと考えた。

二点目は、これまでの研究テーマとしてきた米需給体制に関わり、先の課題を取り組む際に意識しておくことにした事項である。長崎において17世紀半ばから1700年代初めにかけて、周辺諸国から十分な米が供給されていないという受難の時期であり、この点がオランダ人たちにはどのように映っていたか（あるいは映っていないのか）、「日記」の記述をその有無も含めて確認することである。この点は市中の米需給に関する史料が少ない中で、「日記」の記事が使用可能かどうかを見通すためでもある。

さらに時期については次の二点から17世紀後半から18世紀初めに設定することにした。一つは先に述べた二つの課題と関係する時期であり、また長崎において貿易のための数々の組織が創設、変遷していく時代であるということである。もう一つは長崎においても史料が比較的希薄な時期であるということが挙げられる。長崎は寛文3年（1663）の大火によりそれまでの史料がほとんど消失してしまっており、この時期に関する史料はまとまっていないのが実情である。したがって、「日記」を通して少しでもその不足が補えるのではないかと考えた。

二、調査の概要

上記の課題のため、オランダ国立中央文書館では主に「日記」の原本の調査、閲覧をすることにした。国内では東京大学史料編纂所にて「日記」の写真帳（マイクロフィルム焼付本）が閲覧できることから、渡航前の準備として閲覧する箇所をあらかじめ絞り込むことにした。「日記」は年度（例年10月から翌年10月頃まで）ごとにまとめられており、本文と索引のための頭注が設けられている。各年度の最初はその頭注とフォリオ（folio）番号が記され、検索したい記事の場

所が見つけやすいよう便宜が図られている。先に各年度の最初の部分を見る作業により、原本での確認が必要な箇所や一通り目を通したい部分を大まかに把握した。事前準備では、「日記」頭注が記された以外の部分は本文を参照する必要もあり、必ずしも予定していた当該時期すべてについて作業が行えたわけではなかったが、現地での手間を大幅に省くことができた。

文書館ではマイクロフィルムで閲覧できるものについては原則として原本の閲覧できない、ということであるので、はじめにマイクロフィルムに目を通すことにした。そこで、レファレンスコーナーに置いてある目録のファイルから「日記」が含まれている日本関係文書（NFJ：Nederlandse Factorij in Japan）の番号とマイクロフィルム番号の照合を行った。ところが、年代順にフィルム番号が整理されているわけではなく、1本のフィルムに全く種類の異なる史料が含まれている場合や、1年度が複数本にわたる場合も前後の連続する番号ではないなど、戸惑うこともままあった。また、マイクロリーダーが設置してあるスペースは館内で照明が薄暗いところに位置しており、ただでさえマイクロフィルムの解読がたやすいとはいえない明るさであった。その上に、撮影された状態が思わしくなく、史料の解読が困難であるため原本閲覧の必要が強く感じられた。このようにフィルムの閲覧に従来予定していたよりも多くの時間をとられることになった。その後、ある程度フィルムを見終わった段階で、レファレンスカウンターにて事の次第を説明し、原本を請求することにした。思っていたよりも簡単な手続きで申し込むことができ、そして請求した史料のうちほとんどは閲覧を許可された。ただ、一部については状態が悪いとして出していただけなかった。時には係員の手違いから請求した史料が予定していた時間を過ぎても出てこないことや、異なる請求番号の史料が出されたこともあったが、比較的順調に進めることができた。そして、必要最低限の年度分の「日記」の原本を請求していたが、3から5年度分が一つの箱に入って保管されていることが多く、1年度分を請求した場合に、その年度が含まれる箱で貸し出されることがほとんどであったため、前後の年度の「日記」も原本に触れられるという思いもかけない幸運に恵まれた。加えて、一度出してもらった史料は手続きの上、2日間取り置いてもらうことができるため、その日に作業が終わらなかった場合も、翌日はすぐに原本の閲覧ができ、非常に便利であった。

原本の閲覧は当然のことながら写真帳やマイクロフィルムで見ていた時と異なり、非常に読みやすかつ

た。例えば単なる汚れなのか、上書きして書き直したものであるか、判然としない点でも、現物では一目瞭然であり、また一文字一文字のインクのかすれや時間を経て色あせた様子など、当時の筆遣いが手に取るようにわかり、非常に感激した。そして閲覧が許可されたうちの一部の年度については痛みが大分進んでいるものもあったため、取り扱いには普段以上の注意を払う必要があった。

以上のように渡航前に予定していた年代（1670年度以降）に関しては一通り原本の調査を終えた。しかしながら、その調査の過程でさらに年代をさかのぼらなければならないことが判明し、当初予定していたデータの整理を後回しにして、新たに追加のデータ収集を行うことにした。もちろん渡航前の準備が十分でなかったことが若干悔やまれたが、これまでに立てていた予想をいい意味で裏切ることであり、新たな発見が期待された。

追加の作業は先と同様に別の年度（1647－69年度）の「日記」を読んでいくことであり、順調に進められた。また、新たに検討する必要が生じた年代に関しては一部がすでに英語訳が出版されていることから、時間短縮のためにも、それらを先に閲覧、複写の上、それから必要部分をマイクロフィルム、あるいは原本にて閲覧することにした。原史料の申し込みよりも簡単に、刊本は同館に設置されているパソコンから検索と閲覧の申し込みができる。ところがパソコンとの相性が悪く、何度か試してみたがうまくいかず、結局は同館の職員の方に事情を話して、手助けしていただき、希望の刊本を閲覧することができた。英語訳本⁶の2冊（1641－60年）を参照した結果、1650年度以降に絞り込むことができ、さらに実際にマイクロフィルムでの閲覧箇所を月日レベルで特定することができた。その量は思っていたほど多くはなかったため、原本での最終的な確認も効率的に短い時間で終了した。

以上のように、滞在した約2週間で、マイクロフィルム、および原本にて閲覧した「日記」は1651年度から1697年度の46年度分におよび、そのうち請求した分の8割方は原本での閲覧が許可された。

最後に「日記」の字体について述べておきたい。「日記」は筆記体（「くずし字」）で書かれており、東京大学史料編纂所編『日本関係海外史料』オランダ商館長日記、原文編（現在、慶安2年（1649）10月まで刊行）を除いて翻刻はなく、日本の古文書と同様に「くずし字」を解読する必要がある。17世紀のオランダ語の「くずし字」は、現在のアルファベットの筆記体と異なり、非常に特徴的なくずし方がなされている。ま

た書き手によっても個性がよく表れており、くずし方の差が激しいといわざるを得ない。アルファベットが26文字で、大文字・小文字の別があるとしても、日本の古文書のくずし字と比べて、くずし方のバリエーションがそう多くはないのは明らかである。しかしながら、筆のすさびが文字の一部に見えてしまうことや、その逆も然りということがある。その字体に一通り目が慣れ、一定速度で解読ができるようになるまでは筆者の力量不足もあり、かなりの悪戦苦闘を強いられることになった。また目が慣れた頃にはその年度は終わり、次々に別の年度のそれぞれ異なった「くずし字」を解読していかなければならないため、原本、マイクロフィルム双方の閲覧において原文読解の作業に時間を要してしまった点は否めない。

三、研究の成果と今後の展望

本調査により、設定した二つの課題についてそれぞれ以下の成果を得た。

まず主要な課題であった第一点目について、閲覧した46年度分の「日記」から、追っていた用語が含まれる記事を38件見つけることができた。その中でも当該用語の初出をほぼ特定でき、かつ従来、予想していたよりもかなり早い時期であることが分かり、この点が一番の収穫であったことを強調しておきたい。また別の年度においては括弧書きで説明が加えられていることからその用語の使い方の変遷を垣間見ることができる。ところが記事によってはそれぞれで分量が全く異なり、その文脈のみからでは行間まで読み取れない部分もある。また、年度によって単語が用いられる頻度にばらつきが見られ、全く使用されていない年もある。このことから記事がない年度は見落としがないか、もう一度見直しをする必要があると感じている。

次に2点目の課題に関しては、前者と比べて明確なかたちで目的を達成できたわけではなかった。しかし、「日記」の中には数は少ないながらも米需給に関する記述が見られ、これらは今後の研究でも使用できそうな手応えを得た。

現在は収集した史料の解読とデータの整理、必要な部分は史料の日本語訳の作成を行っている。また、日本（長崎）側との史料とつぎ合わせを行い当時の社会状況の把握し、さらに研究書を参照しながら、検討を進めている。加えて1698年度以降についても同様の作業を今後続けている。なお本調査の成果は17世紀後半から18世紀初めにおける長崎に関する研究として、学会誌（未定）への投稿を目指して現在準備中である。

しかしながら、調査を通じて数々の課題も浮かび上

がった。

まず、「日記」の写本や、「日記」以外の史料を蚊帳の外に置いているということである。オランダ人による日本関係の史料は長崎-バタヴィア間の書簡や彼らの会計帳簿などが存在し、これらの史料を参照しつつ、さらに分析を進めていきたいと考えている。

次に「日記」が書かれた時期の長崎（や日本）の社会状況だけでなく、オランダ（VOC）側の会社としての経営、貿易取引の方針、会社を取り巻いていた世界の状況を把握することである。長崎出島はVOCの日本商館であったことを考えると、「日記」の記述は会社の方針に則ったものであり、その点を考慮した上で記事を吟味しなければならない。つまり、今回調査した用語も、彼らの文脈の中ではどのように用いられていたかを総合的に判断する必要がある。

さらに当該の用語と同じ意味で用いられた単語の有無を全く検討していない点である。日本語訳された「日記」を見ていると一つの日本語訳にいくつかの単語が相当する場合がある。この点について一単語につき一単語の訳と決めつけず、注意を払い、柔軟に対応していきたい。

これらは現在の作業のなかで、可能なものに関しては反映していきたいと考えている。

今後は本調査で明らかにしたことを踏まえてこれまでの研究と学位論文の中で結びつけていきたいと考えている。学位論文では近世の長崎の特質を①長崎それ自体、そして②その周辺地域、さらには③海外から、という三つの視点を通して検討し、明らかにすることを目標としている。すなわち本研究は③の一部に相当する。先に述べたとおり、「日記」は約200年以上にわたって書き継がれ、量的にも非常に豊富であり、近世期の日蘭関係史を研究する上で格好の素材である。これまでも日蘭双方の史料を用いた研究は見られるが、オランダ側の史料を用いて、長崎の都市そのものを検討した研究は少ないのが現状である。海外の目を通して貿易都市長崎を見ていくことが、今回対象とした以外の時期についても行えるかどうか見通すための試験的な作業であったと考えている。

また本研究自体は次のように位置づけられると考える。一つは都市長崎の研究を通して、天領に関する研究や諸都市との比較のための素材を提供することである。次に社会的、文化的側面から日蘭関係史を検討することである。加えて、VOCやヨーロッパ諸国（イギリス、フランス）の東インド会社⁷が商館を置いたアジア各都市（中国-広州、インド-ムンバイ、スーラト、マドラス、ボンディシェリ、カルカッタ、スリランカー-コロンボ、インドネシア-バタヴィアなど）との比較の可能性をも探るものであり、これらの点において画期的であるといえる。

最後に今回の調査でのもう一つの収穫について触れておくことにする。それはオランダ東インド会社の研究者と話す機会が得られたことである。オランダ国立中央文書館はVOCに関する膨大な史料を所蔵しており、各国から研究者がVOCに関連した調査に訪れている。そのうち一部の方々とお昼をご一緒する機会があり、これまで筆者自身がそこまで意識していなかったVOCについて深く考えさせられるきっかけとなった。また、積極的に情報を交換し、収集する姿勢には感心させられ、見習いたいと思うほどであった。このように、とても刺激的であり、かつ密度の濃い調査の日々を過ごせたことを付け加えておきたい。

注

- 1 東京大学史料編纂所編『日本関係海外史料』オランダ商館長日記、譯文編之一（上）～十、1976-2005年
- 2 村上直次郎訳『長崎オランダ商館の日記』第一輯-第三輯、岩波書店、1956-1958年
- 3 日蘭学会編、日蘭交渉史研究会訳注『長崎オランダ商館日記』1-10、雄松堂出版、1989-1999年
- 4 松本四郎「貿易都市の支配者と住民」（同『日本近世都市論』東京大学出版会、1983年、19頁。）
- 5 荒野泰典「長崎口の形成」（加藤榮一・北島万治・深谷克己編『幕藩制国家と異域・異国』校倉書房、1989年）
- 6 Cynthia Viallé & Leonard Blussé, *The Deshima Dagregisters* Volume XI-XII, Leiden 2001-2005
- 7 羽田正『東インド会社とアジアの海』興亡の世界史15、講談社、2007年

やだ じゅんこ／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 国際日本学専攻

【指導教員のコメント】

矢田純子さんは、近世期に貿易都市として特異な位置を占めた長崎を、それを取り巻く九州諸藩の動向や、海外との交流なども視点に入れて、社会的・経済的観点から幅広く捉えようとしてきた。その延長線上に、世界史的な視点から長崎を捉え直すことを目指した今回の調査は、以下の理由から、大変、意義のあるものであったと

いうことができる。

第一に、オランダ側の史料の原本にあたって、海外から長崎を見た結果、長崎に関する重要タームの使用方法や起源などについて、日本側の史料からはわからない新たな事実を獲得した点である。これまでも矢田さんは、日本各地で近世史料の原本を数多く調査してきたが、その経験が海外においても活かされ、周到な事前準備を行ったうえで現地へ赴き、かなり効率的な調査を行ったようである。その結果、日本で予想したとはちがう結果が出たことについても、その場で臨機応変に対応し、現地調査の意義を十分に引き出している。

第二に、日本側では史料の喪失などで欠落した部分を、多少なりとも、海外の史料から補える可能性が確認できた点である。この点は、まだ見るべき史料が多く残されているなど課題もあるが、今後の調査へのステップができたことは喜ばしい。

以上、こうして得られた調査成果は、やがて活字論文または博士学位論文としてまとめることが予定されており、近く具体的なかたちで還元される運びである。近年では、平成20年の国立歴史民俗博物館第三展示室リニューアルに見られるように、世界のなかの近世日本に対する関心が高まっているが、今回の矢田さんの海外調査は、そうした流れのうえに立ち、近世史研究の新たな地平を開拓する一助ともなるものである。

(お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 准教授 神田 由築)